# １５　書写教育研究部

部　長　　沖　　孝子
副部長　　鴨川智香子
副部長　　榛葉　恵理

１　事業推進のあらまし

(1) 静岡県教育研究会書写教育研究部のテーマ

「正しく整えて書くことを生活に生かそうとし、文字文化を大切にする子を育てる書写教育」

(2) 小笠地区書写教育研究部のテーマ

「正しく整えて書くことを生活に生かそうとし、文字文化を大切にする子の育成」

(3) 小笠地区活動方針

日々の書写指導や席書コンクール、書き初め作品の評価を通して、児童生徒が自分の課題をもてるように指導するとともに、児童生徒の学習意欲を高める。

２　今年度のあゆみ

| | | |
|---|---|---|
| ５月１０日 | 第１回書写教育研究部推進委員会 | 本年度の組織の確認、年間計画 |
| ５月３１日 | 第１回県書写教育研究部委員研修会 | 本年度の組織の確認、年間計画 |
| ６月２４日 | 第２回書写教育研究部推進委員会 | 席書コンクールの日程・係分担打合せ |
| ８月　８日 | 第３回書写教育研究部推進委員会 | 中部地区席書コンクール評価会の事前研修<br>課題指導ポイント集作成 |
| １０月１１日 | 第２回県書写教育研究部委員研修会 | 席書と書き初めコンクール企画 |
| １０月１７日 | 第４回書写教育研究部推進委員会 | 小笠地区席書コンクール作品評価会事前研修 |
| １１月　９日 | 一斉研究報告会 | 席書コンクール作品評価<br>中部地区席書コンクール評価会準備 |
| １２月　６日 | 中部地区席書コンクール評価会 | 席書コンクール作品評価 |
| １月２０日 | 教育研究代表者会 | 協会の活動反省等 |
| １月２３日 | 小笠地区書き初め作品評価研修会 | 書き初めコンクール作品評価 |
| ２月　３日 | 県書き初め評価会 | 書き初めコンクール作品評価（静教研副部長） |
| ２月　９日 | 第３回県書写教育研究部委員研修会 | 本年度のまとめと来年度への方向付け |
| ２月１３日 | 第５回書写教育研究部推進委員会 | 今年度の研究推進･運営の反省、来年度への引き継ぎ |

３　席書コンクール評価会

（１）　１年　課題　ぼくのすきなものは、ほたるです。ぴかぴかひかってきれいだからです。

・全体的に、よく書けている作品が多かった。はみ出しや敷き写しがあまりなかった。

・手首がうまく使えず、苦戦している作品があった。鉛筆の持ち方を丁寧に指導し、手首をやわらかく使えるように指導したい。

（２）　２年　課題　夏にキャンプをしました。夜空を見上げると、星がきらきらかがやいていました。

・全体的に丁寧に書けていて、漢字は形がとれている作品が多かった。

・「見」「星」の書き順が違うのか、接し方と交わり方が違う作品もあった。

・中心を意識して書いている作品が多くあった。

（３）　３年　課題　木

・初めての毛筆だが、勢いよく堂々と書けている作品が多かった。

・バランスを整えることが難しく、正しく書けている作品が少なかった。

・筆脈の感じられるところまで書き込む時間がない実情がある。指導の効率化を図りたい。

（4）　４年　課題　左右

・お手本と比べて右側にずれている作品が多かった。中心を捉えることが難しい作品だった。
・「右」は、横画の長さが「左」より長くなるよう正しく指導したい。
・横画がまっすぐ書かれている作品が多い。右上がりの意識を高めたい。

（5）　５年　課題　飛行

・今年度は大きさのよい作品が多かった。
・「行」のはねの向きが悪い作品や「飛」の中心の「｜」の長さが短い作品などが目立った。

（6）　６年　課題　街角

・３つの部分からなる「街」（真ん中が高く、右が低い）のバランスに気を付けて書けている作品が多かった。
・「街」「角」それぞれのはねの向きが意識できていない作品が多数見られた。

（7）　中１年　課題　栄光

・課題が目立つ作品が多かった。例えば、「光」のあし部分が短くなってしまう作品があった。また、左はらいから次の画につながる筆脈（はらい切らず、とめて筆を返す）を表現することが難しそうであった。
・名前の部分を空けておいてから、書いてある作品があった。中心がずれてしまうので、注意が必要である。

（8）　中２年　課題　深緑

・今年度からの新しい課題である。名前の部分を空けておいてから書いてある作品があった。
・半紙に対してのバランスが取れず、大きすぎる字や小さすぎる字が多くあった。
・「糸」の上の部分の筆脈が難しそうであった。

（9）　中３年　課題　旅立ちの朝

・名前の部分を空けておいてから、書いてある作品があった。
・５文字をバランス良く書くのが難しい課題だった。余白が上手く取れない作品があった。
・一行目に３文字を収めることに必死で筆脈が定まらない作品があった。また速筆でかけない生徒が多かった。
・左はらいからの筆脈が途切れている作品が多かった。（特に「旅」）
・横画の右上げが足らずに、文字が傾いてしまう作品があった。（特に「朝」）

(10)　特別支援学級

・一生懸命書いた作品が多かった。時間をかけて一画一画を書いたと感じる作品もあった。
・硬筆はマスからはみ出してしまう作品が多かった。小学校の毛筆は右払いが上手な作品が多かった。にじみが多い作品もあった。中学校は、書道教室に通っているのか、書き慣れた生徒もいたが、楷書に近い字も多かった。

## 4　今後の課題

本年度は、本研究部作成の「席書課題指導ポイント集」を指導の一助となるように、各学校に配付した。

席書コンクールの作品評価会では、教科書教材をよく研究して指導が行われたことが伺われる作品が多く出品された。しかし、文字の形を正しくとらえて書くことや楷書から行書への筆脈の指導には、まだ検討の余地があると思われた。始筆や終筆の筆づかい、文字の大きさ、楷書から行書への筆脈の指導など、課題となったところを各学校に伝えていく必要がある。また、毛筆については、名前を書く場所をとってから中心をとると、紙の中心からはずれてしまう作品ができてしまう。今後も、各学年の指導内容を押さえた書写の授業を大切にし、小笠地区の書写教育のさらなる向上を図っていきたい。

# １６　学校図書館研究部

部　長　伊藤　貴亮
副部長　平岡　綾子
副部長　太田　葉子

１　研究経過のあらまし

（１）　研究テーマ　　「知識をつなげる　学びを広げる　心をはぐくむ　学校図書館」
－本に出会い、本に関わり、本と生きる－

（２）　研究の概要

学校図書館や司書教諭の果たす役割が重視される今、司書教諭や図書館担当者としての力量を高め、本テーマに向けての活動を行う。

ア　授業公開と講師招聘により、実践的な指導力を高めるための一斉研究報告会を実施する。

イ　読書感想文や読書感想画コンクールへの参加を通して、読書意欲の高揚を図る。

ウ　読書センター・学習センター・情報センターとしての機能を十分発揮し、学びを支える学校図書館の充実を図る。

２　研究のあゆみ

| 活動名 | 期日 | 会場 | 内容 |
|---|---|---|---|
| 第１回研究推進委員会 | ５月 16 日(月) | 小笠教育会館 | ・年間計画作成 |
| 県・研究委員研修会① | ５月 23 日(月) | 県教育会館 | （部長参加） |
| 第２回研究推進委員会 | ６月 23 日(木) | 小笠教育会館 | ・読書感想文コンクールについて<br>・夏季研究大会等・一斉研について |
| 静教研夏季研究大会 | ８月３日(水) | オンライン | （湖西磐周大会） |
| 第３回研究推進委員会 | ８月５日(金) | 小笠教育会館 | ・一斉研について（授業構想等） |
| 小笠地区読書感想文審査会 | ９月６日(火) | 小笠教育会館 | ・感想文審査<br>・参加者集計、県出品 |
| 県・研究委員研修会② | 10 月 12 日(水) | 県教育会館 | （部長参加） |
| 県読書感想文回覧審査 | 10 月 13 日(木)<br>～11 月７日(月) | | ・県から回覧された作品を読み審査<br>（小学校高学年：川崎 美彩教諭） |
| 第４回研究推進委員会 | 10 月 17 日(月) | 掛川市立<br>東中学校 | ・一斉研について、授業案検討<br>・一斉研の運営について |
| 一斉研究報告会下見 | 10 月 27 日(木) | 掛川市立<br>大坂小学校 | ・一斉研の会場下見<br>（副部長） |
| 一斉研究報告会 | 11 月９日(水) | 掛川市立<br>大坂小学校 | ・公開授業：鈴木捺通子教諭<br>・講師：石田直美　庄内学園校長 |
| 読書感想画審査会 | 12 月 20 日(火) | 掛川市立<br>千浜小学校 | ・読書感想画の審査<br>・コンクール参加者数集計 |
| 県・研究委員研修会③ | ２月 24 日(金) | | （部長参加） |
| 第５回研究推進委員会 | ２月 28 日(火) | 小笠教育会館 | ・読書感想画県出品作品返却作業<br>・県感想文、県読書感想画賞状配布<br>・今年度の研修、活動の反省 |

３　一斉研究報告会

（１）　期　日　11 月９日（水）

（２）　会　場　掛川市立大坂小学校

（３）　参加者　56 名

（４）　内　容

ア　公開授業

（ア）３年　国語　「組み立てをとらえて、民話を紹介しよう」

（イ）　授業者　鈴木 捺通子 教諭（担任・司書教諭）

（ウ）　本時の目標

選んだ民話の面白いと感じたことを発表し合う活動を通して、一人ひとりの感じ方などに違いがあることに気付くことができる。（思考力・判断力・表現力等Ｃ(１)カ）

イ　協議　【公開授業について】

・子どもたちが本に親しむことができるように、司書さんとの選書、掲示、同じ本・違う本の３人ペア、ワークシートなどのたくさんの手立てが取られていた。

・ブックトークの際には、授業のねらい等を司書と先生が打ち合わせをしておくことで、より効果的なブックトークになると感じた。

・「起承転結がしっかりと描かれている民話」という意図をもって選書していてよかった。

・授業終わりに読んでみたい本のところへ走っていく子どもたちの姿から、この単元を通して本の世界に浸っていたのだとわかった。

・３年ぶりの授業公開と対面での協議、講話により、大変実りの多い機会となった。

ウ　指導助言　　浜松市立庄内中学校、庄内小学校　　石田 直美校長

【教育課程の展開に寄与する学校図書館を　また一歩進める】から一部紹介

・子どもの現状

圧倒的に語彙が少ない　→ 圧倒的な読書量が必要

そのためには、子どもと情報を結びつけることが大切となる。

・廃棄と選書

庄内学園では、廃棄と選書を大事にしている。「毎週月曜日は新刊の日」。

・配架の工夫　　～動線に「本（情報）」～

どの学年でも立ち読みができるよう、校内の様々な場所に「立ち読みコーナー」を設置。

（登校してから／休み時間も／移動教室前に／部活前に／先生も／部活の監督も）

４　成果と今後の課題

・３年ぶりに授業を公開できたことで、小中学校の教諭、市内外の学校司書に御参加いただき、学校図書館についての現状について意見交換することができた。

・学校図書館の３機能である、「読書センター」「学習センター」「情報センター」としての活用事例や授業実践、学校司書との連携についてもさらに研究を深めていきたい。

・子どもが本に触れる機会が増えるよう、選書に限らず廃棄、配架、動線の工夫をし、語彙力の基盤をつくっていきたい。

# １７　学校保健研究部

部　長　吉村紳治郎
副部長　山崎多恵子
副部長　髙橋　浩美

1　研究経過のあらまし

(1)　研究テーマ

自分の身体と主体的に向き合う子どもの育成
～発達段階に応じた切れ目のない健康教育～

(2)　テーマ設定の理由

各中学校区の保健室から見た児童・生徒の健康課題は、自己肯定感やコミュニケーション能力の低下、生活習慣の乱れ、メディア依存など多岐にわたっている。このような実態から、私たち小笠地区学校保健研究部の願う子ども像を「主体的に考える子」「たくましさをもった子」「判断力をもった子」とした。近年、少子化やネット社会、価値観の多様化等の社会問題があり、子どもの健康課題の解決や願う児童･生徒像の実現にとっても、子どもの発達に合わせた切れ目のない働きかけや地域ぐるみでの取組が重要であると考えた。そのため、小学校・中学校を義務教育の９年間として捉え、中学校区を１つの単位とし、地域や家庭と連携しながら発達段階に応じた繰り返しの指導をし、目指す子ども像を共有しながら研究を進めていくことで、願う子ども像に迫ることができると考えた。そして、これらのことを全て合わせて「切れ目のない健康教育」と定義した。その上で、地区のテーマを「自分の身体と主体的に向き合う子どもの育成～発達段階に応じた切れ目のない健康教育」とし、研究を進めてきた。そして、今年度、静岡県教育研究会学校保健研究部夏季研究大会において発表した。

2　今年度のあゆみ

(1)　研修会・会合

| 期日 | 会合 | 会場 | 内容 |
|---|---|---|---|
| ５月 16 日（月） | 第１回研究推進委員会 | 小笠教育会館 | 静教研に向けての計画 |
| ６月 17 日（金） | 第２回研究推進委員会 | 内田地区センター | 静教研大会配信内容の検討 |
| ６月 28 日（火） | 第３回研究推進委員会 | 内田地区センター | 静教研大会資料と発表内容の検討 |
| ７月 14 日（木） | 静教研プレ発表会 | 御前崎市<br>佐倉地区センター | 静教研発表内容の検討<br>小笠・榛原実行委員会と合同実施 |
| ７月 19 日（火） | 第４回研究推進委員会 | 御前崎市<br>佐倉地区センター | 静教研発表内容の検討<br>一斉研究報告会の内容検討 |
| ８月　３日（水） | 静教研準備会 | 御前崎市<br>佐倉地区センター | 静教研準備<br>静教研リハーサル |
| ９月 26 日（月） | 第５回研究推進委員会 | 内田地区センター | 一斉研究報告会の内容検討 |
| 11 月９日(水) | 一斉研究報告会 | 内田地区センター | 実践発表(菊西学舎･土方小･掛北中)<br>分散会①② |
| 12 月８日(木) | 第６回研究推進委員会 | 内田地区センター | 来年度の研修に向けて確認 |
| ２月６日(月) | 第７回研究推進委員会 | 内田地区センター | 来年度の研修に向けて確認 |

３　一斉研究報告会

(1)　日時　　令和４年 11 月９日（水）13:45～16:30

(2)　会場　　内田地区センター

(3)　内容

ア　令和４年度静岡県教育研究会学校保健研究部夏季研究大会の報告及び今後の研修について

(ｱ)　研究大会の報告

・初めてのオンライン（ライブ配信・録画配信）での開催や小笠地区全ての中学校区の実践を発表等、新たな開催方法で実施できた。

・令和元年度からの研修の積み重ねが成果につながった。

(ｲ)　今後の研修

・中学校区での研修を継続していく。

・学校医、学校歯科医、学校薬剤師、栄養教諭や関係機関と連携した取組を進めていく。

イ　実践発表

(ｱ)　菊西学舎

テーマ「栄養教諭との連携　～菊西学舎の取り組み～」

学校保健委員会への参加や保健通信の共同制作

(ｲ)　掛川市立土方小学校

テーマ「健康学習の日」

全校統一の日程で健康学習の日を設定し、講師による指導を実施

(ｳ)　掛川市立北中学校

テーマ「学校医との連携　～食物アレルギー救急対応　エピペンについて学ぼう～」

エピペン所持生徒受け入れ体制の整備や学校医による職員対象の救急対応研修の実施

ウ　分散会

(ｱ)　分散会①（校種、校区混合）

目的：各校の学校医、学校歯科医、学校薬剤師、栄養教諭との連携や関係機関との連携について学ぶ。

(ｲ)　分散会②（中学校区）

目的：実践発表や分散会①を受け、各校や中学校区で活かせる連携について話し合う

(4)　参加者アンケートより

・現在行っている連携した取組は、絶やすことなく続けていきたい。

・各校や中学校区で連携している専門機関や外部機関を一覧にして、小笠地区全体で共有していくとよいのではないか。

(5)　成果と課題

・様々な形態の、外部との連携の実践を発表することで、具体的な連携の姿がイメージしやすくなった。

・分散会①では、校種や年齢、中学校区が異なるグループ構成にしたことで、他校や他中学校区の取組を学ぶ良い機会となった。また、コロナ禍により久しぶりの意見交換の場となり、養護教諭同士の横のつながりを深めることもできた。

・今後、専門機関や外部機関との連携をどのように広めていくか、また、どこに焦点をあてて研究を深めていくのかについて考えていきたい。

# １８　事務研究部

部　長　伊村裕美子
副部長　堀内　智子
副部長　飯塚　恵味

１　研究経過のあらまし

静岡県公立小中学校事務職員会の「しずおか　コスモスプラン」では、「子どもの豊かな育ちを支援すること」「経営的視点をもって校長の学校経営を補佐すること」を学校事務職員の職務とし、学校の重要な経営スタッフとしてマネジメントできる人「スクールマネージャー」を学校事務職員の目指す姿としている。

小笠地区は、研究テーマを「子どもの豊かな育ちを支援する学校事務」、研究の重点を「人材育成に向けた研究を通し、スクールマネージャーとしての役割を果たす学校事務職員の育成を図る。」とし、「目指す姿」に近づくよう取り組むこととした。

２　今年度のあゆみ

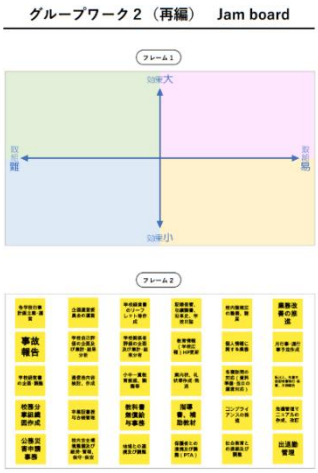
一斉研究報告会に向けて、全体研修会では「事務職員の研修の歴史とこれから」「総務課事業及び学校事務に係る課題・小中学校業務（事務）の再編及び事務職員の職務の変容」と題し、経営参画や再編について深めた。また、第二回班別研修では、Jamboard を試行し、機器の活用を通してグループワーク進める方法を研修した。研究の重点を達成するため、年間を通し経営参画と再編について研修した。

| 月　　日 | 研修会名 | 内　　容 |
|---|---|---|
| ５月 16 日（月） | 第１回研究推進委員会 | ・年間研修計画立案<br>・第１回全体研修会と一斉研究報告会の研究推進 |
| ６月 13 日（月） | 第２回研究推進委員会 | ・第１回全体研修会と第一・二回班別研修、一斉研究報告会の研究推進 |
| ６月 20 日（月） | 第１回全体研修会 | ・講話 焼津市立焼津中学校 共同学校事務室参事<br>・指導講話　静西教育事務所　次長兼総務課長 |
| ６月　各班による | 第一回班別研修 | ・事務経営と自己研修計画について |
| ９月 16 日（金） | 第３回研究推進委員会 | ・第１回全体研修会の反省<br>・一斉研究報告会の研究推進 |
| ９月　各班による | 第二回班別研修 | ・Jamboard の試行と各種研修報告<br>・学校財務、事務改善について |
| 11 月９日（水） | 一斉研究報告会 | ・グループワーク<br>・グランドデザイン策定委員会経過報告 |
| 11 月 24 日（木） | 第４回研究推進委員会 | ・一斉研究報告会の反省<br>・第三回班別研修の研究推進 |
| １月 19 日（木） | 第５回研究推進委員会 | ・今年度の研究推進の反省<br>・次年度の研究推進と全体研修会について |
| １月　各班による | 第三回班別研修 | ・これからの学校事務の実務について<br>・各種研修報告と今年度の反省について |

３　一斉研究報告会

掛川市教育委員会・大坂小学校・浜岡中学校の３会場に分かれ、グループ協議は対面で、報告は ZOOM で行うハイブリッド形式で報告会を実施した。

(1)　グループワーク




ワークは「経営参画」と「再編」の二つを設定し、ワークの本数・順番を含めて各グループで選び、進めた。「経営参画」では、自分が行った取り組みを発信し、他者の情報を吸収し、新たな取り組みを皆で考え、明日からの経営参画のために情報交換をしながらワークを行った。グループメンバーは幅広い経験年数で構成したため、様々な実践を共有することが出来た。「再編」では、「相良中学校取組中間報告」のうち、他職員との協働を含め、新たに事務職員が携わるものを付箋にまとめ Jamboard を活用し、小笠が行うと想定する「加配なき再編」を話し合った。取組易いか、効果はあるかの視点で付箋の位置を決め、協働する職員ごと色を変えたが、一つとして、同じ Jamboard にはならなかった。各グループ、何を重点に話し合ったか、ワークの内容について情報交換した。

～会員の感想 抜粋～

・グループワークのみに集中した方法はとても良い。

・事前に配布された資料もわかりやすく、当日の内容や目的が明確になっていたこともよかった。

・限られた時間が有効活用できたこと、若手もベテランもお互いに刺激を受けることができて、非常に有意義な研修だった。

(2)　グランドデザイン策定委員会経過報告

令和５年度末に第１版を予定している。コスモスプランは、スクールマネージャーを目指すために事務職員個人に必要な資質・能力の向上をはかるための研究指針だった。それに対し、グランドデザインは静岡県事務職員会の研究団体としての研究方針である。「子どもの豊かな育ちを支援する」をミッション（使命・役割）とし、５年・10 年後の学校を想像し「学校・家庭・地域等と新たな学びの場を協創する」をビジョン（使命・役割を果たすためにあるべき姿）とした。

４　成果と今後の課題

今年度もコロナウイルス感染症対策として、オンラインと・集合形式を組み合わせたハイブリッド形式で実施した。アンケートからオンラインでの研修が滞りなく行えた、移動時間の短縮にもなったなど、肯定的な意見をいただいた。

「スクールマネージャーとしての役割を果たす学校事務職員」を重点に掲げ、経営参画や再編について年間を通し研修を進めた。一斉研究報告会では、他校との情報交換を通し、新たな経営参画方法の吸収や小笠が行うと想定される加配なき再編について理解を深めることが出来た。

課題は、オンラインによる弊害として音声の聞きづらさや、接続関係の準備では３会場のうち、２会場で事務職員以外の ICT 担当や ICT 支援員の協力を必要とする問題が起こった。また、研究部長や司会、報告者、ホストの会場を、分散したことにより各会場での運営負荷が増加した。今後、同様のハイブリット形式で行う場合は、司会や報告者等を一つの会場に集中させ、運営することも視野に入れ検討が必要である。

# １９　特別支援教育研究部

部　長　後藤克巳
副部長　松浦弘承
副部長　殿岡陽子

１　研究経過のあらまし

特別支援教育研究部では、「一人一人の良さや可能性をのばし、豊かに生きる力を育む特別支援教育」を研究テーマとして活動している。

他地区同様小笠地区においても、特別支援教育が必要な児童生徒は年々増加しており、そのニーズは多様化している。また、インクルーシブ教育の実現に向け、子供一人一人の教育的ニーズに的確に応える指導や合理的配慮の提供などが求められている。しかし、ニーズの高まりに対して、各学校現場では特別支援教育への取組の困難さが多く訴えられており、試行錯誤が続いている。

そうした課題に対し、特別支援教育に携わる教員の資質向上や関係機関との連携を目指し、研究を行った。今年度は、２年ぶりに集会形式とオンライン形式を組み合わせた一斉研究報告会を開催することができた。コロナ禍においてなかなか実施できなかった教員の授業力を高めるための研修会の機会を得て、自校の児童生徒の指導の充実につなげていきたいと考える。

２　今年度のあゆみ

５月１０日　第１回研究推進委員会　…組織、テーマ、研修計画の作成、静教研について
５月１２日　通級部会　教室紹介、研修計画、新任者研修
５月２７日　第２回研究推進委員会　…静教研の発表について
６月１７日　第３回研究推進委員会　…静教研の発表について、一斉研の内容について
７月　８日　第４回研究推進委員会　…一斉研の内容の検討、役割分担
９月１６日～１月１３日　静教研特別支援教育研究部　研究大会　紙上開催
分科会（ホームページに資料を掲載）
「一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導や支援の工夫」
掛川市立中央小学校　田中和彦教諭
１０月１４日　第５回研究推進委員会　…一斉研の会場確認、役割分担、打合せ等
１１月　９日　一斉研究報告会（会場：掛川市立中央小学校）
１２月　３日　静言研小笠地区講習会
講話　「応用行動分析」を基礎から学ぼう
講師　野村和代先生（常葉大学教育学部講師臨床心理士　医学博士）
１２月１５日　第６回研究推進委員会　…Ｒ４年度活動反省、今後の進路学習会について
１２月１６日　通級部会　講話１「異常構音とその指導」講話２「言語発達遅滞と発達障害」
講師　石間志津代先生（西尾小児科　言語聴覚士）
１２月２２日　通級幼児部会　事例検討
１月１９日　第７回研究推進委員会　…Ｒ５年度活動計画

３　一斉研究報告会

（１）日　時　　令和４年１１月９日（水）１３：３０～１６：３０
（２）会　場　　掛川市立中央小学校
（３）参加者　　集会形式　８２名　オンライン形式１６名　　合計：９８名
（４）内　容
ア　全体会　特別支援教育研究部長　後藤克巳校長の挨拶（特別支援教育の歩みと研究会への取組について）
イ　ワークショップ１（４名の教諭による実践発表）
「やりがい、私の一押し単元・授業・教材」

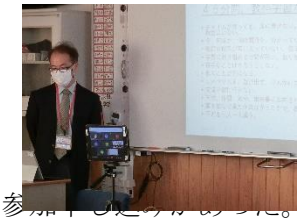
Ａコース（知的学級）　濱口琴代教諭（河城小）
　　平井雅子教諭（浜岡中）
Ｂコース（自・情学級）松浦崇教諭（掛二小）
　　高柳真吾教諭（掛東中）

４名の教諭による実践発表では、日々の授業で大切にしていること、苦労していること、生活単元学習・作業学習・自立活動の具体的な例、ＩＣＴの活用、進路指導など様々な実践を聞くことができた。「早速使ってみたい。」「すぐにできそうでやってみたい。」などの感想が集まり、明日からの授業づくりへの意欲の高まりを感じることができた。

ウ　ワークショップ２

講話　藤田順子教諭（中央小）
「『アセスメント力』をつければ
　楽しくて力になる指導ができる
～Ａさんのために私がしてきたこと～」

特別支援について実践と研究を重ねられてきた藤田順子教諭の講話では、アセスメント・記録の大切さ、書字の苦手な児童への支援など、これまでの多くの実践と共に専門的な知識や支援を聞くことができた。「先生から愛とパワーをいただいた。学び続けていきたい。」「目の前の子供たちのために日々努力する必要性を強く感じた。」などの感想が多かった。多くの教員が特別支援に対する専門性の向上を希望していることが分かった。



４　成果と今後の課題

（１）成果

２年ぶりに集会形式の一斉研が開催でき、多くの参加申し込みがあった。アンケートでは、「自分の日々の授業を振り返る良い機会となった。そのためにまた参加したい。」「どの教員も特別支援学級を担任することが多くなる中、具体的な実践を聞くことができ、大変参考になった。」「藤田先生の深い学びを紹介していただけたことが大変嬉しかった。」などの声が寄せられた。ベテラン特別支援学級担任の実践から学ぶことで、各教員が直面している日頃の授業実践の悩みを解決するよい研修会となった。

（２）今後の課題

一斉研では、多くの参加申し込みを受け、直前でオンラインでも参加できるようにした。感染防止対策を考えながら、多くの教員が研修できる機会を保障するために来年度も集会形式を基本としながらオンラインでも参加できるよう研修会を検討していきたい。今後の一斉研で取り扱ってほしい内容の上位は、「支援学級の教科指導、自立活動、就学支援・進路指導」であった。様々な教育的ニーズが求められている中、すぐに実践できる具体的な授業例や自立・社会参加に向けた進路指導について深く学ことができる機会を提供したい。

# 20　情報教育研究部

部　長　青嶋　一朗
副部長　岡本　識史
副部長　松下　陽祐

1　研究経過のあらまし

研究テーマ「１人１台端末を活用した『個別最適な学び』と『協働的な学び』」

情報教育研究部は、必修化となったプログラミング教育について研究をしてきた。一斉研究報告会では、平成30年度に小学校３学年の総合的な学習の時間、令和元年度に小学校６学年の理科について公開授業を行った。令和２年度は、公開授業はできなかったが、小学校第５学年の算数について研究推進委員の授業実践を参観して研究を重ねてきた。

GIGAスクール構想の下で１人１台端末が整備されてからの２年間は、１人１台端末の活用の仕方について、研究推進委員が研究テーマに沿った各校の実践を持ち寄り情報共有して研究してきた。

2　今年度のあゆみ

| 実　施　日 | 活　動　名 | 会　場 | 内　容 |
|---|---|---|---|
| ５／16（月） | 第１回研究推進委員会 | 小笠教育会館 | 研究活動計画 |
| ７／８（金） | 第２回研究推進委員会 | 小笠教育会館 | 各校の実践共有【実践資料１】 |
| ７／25（月） | 第３回研究推進委員会 | 浜岡中学校 | 静教研のリハーサル |
| ８／３（水） | 静教研夏季大会公開 | 浜岡中学校 | 講演会、実践発表 |
| 11／９（水） | 第４回研究推進委員会 | 小笠教育会館 | 各校の実践共有【実践資料２】<br>来年度の方向性の話合い |

3　各校の実践【実践資料(資料番号)―(ページ番号)―(ページ内番号)】

第２回研究推進委員会、第４回研究推進委員会での各校の実践資料

○よい点　▲改善を要する点

(1)　個別最適な学び

ア　提出物を作成する方法を児童生徒が選ぶ。【実践資料１―１－２、２―３―実践１】
→従来のノートやGood Noteへの書き込み、アプリでのキーボード入力などから選ぶ。

○文字を書くことが苦手な児童生徒の中に、Good Noteへの書き込みやキーボード入力なら意欲的に取り組む子もいた。

○授業時間内に提出ができない場合は、家庭からでも提出することができる。

○ドライブなどの共有スペースに提出することで、他の児童のよいところを参考にできる。

○写真やイラスト、図形などを簡単に挿入できたり、多様なペンや色を使えたりするので、ノートへ書き込むよりも多様なデザインやアイデアが生まれやすい。

▲児童生徒が使用するタブレット用のペンを検討する必要がある。

イ　復習の仕方を児童生徒がニューコース（菊川市)、ミライシードのドリルパーク（掛川市)、アプリなどから選ぶ。

○ニューコースとClassroomの活用することで、実施状況を確認できる。【実践資料１－１―３】

○スライドを使い、自学を行う。【実践資料１－２】

ウ　苦手を排除し、目標に即した活動を行う。【実践資料１－４―２②】

○目標に即した活動へ多くの時間を確保することができた。

エ　自分にとって必要な場所を繰り返し再生する。【実践資料２―１―２】

○外国語や音楽、国語の音読など、活用の幅が広い。

オ　活動に合わせて、身に付けたＩＣＴスキル（スプリットビュー・マークアップなど）を活用する。【実践資料２－２】

(2)　協働的な学び

ア　自分の考えや作成物を提示し、共有する。

【実践資料１－１－１、１―３、１―４、２－１―１、２－４】

○困っている児童生徒がヒントにしたり、早く終わった児童生徒が友達の文と比較してさらに深めたりすることができる。

○誰と話し合えばよいか、目的意識をもって、直接聞きに行くことができる。

○教師が一人一人の考えを把握し、アドバイスしやすくなる。

○グループ化することで、視点が明らかになる。

○他クラスの児童生徒と共有することもできる。

▲タブレット内のデータ整理の指導が必要となる。

イ　複数人で同時に作業する。【実践資料１－４―２①、２－２、２－４―③】

○短い時間で多くのことに取り組める。気付きが多くなる。

○自然と会話が生まれ、教え合いができる。

ウ　相互評価を行う。【実践資料２―３―実践２】

(3)　個別最適な学びと協働的な学び

ア　単元を貫く課題や進め方、評価を提示しておき、児童生徒が学習を進める。

【実践資料１―６～８、実践資料２―７～８】

(4)　その他

ア　GoodNote 使い方マニュアル

イ　スプレッドシートを用いた「持久走記録カード」【実践資料２－２】

ウ　スプレッドシートを用いた「テスト計画表」、「夏休みの計画表」【実践資料２－５～６】

4　成果と今後の課題

この２年間で多くの実践を知ることができ、１人１台端末活用の可能性を広げることができた。児童生徒は端末を使うことに慣れ、係や委員会などの場面で自発的に活用することもできていた。

端末の効果的な活用について、各教科・領域でも話合いが行われている現状がある。今後は情報教育研究部として、どのように研究を進めるべきかという視点をもちながら、１人１台端末の活用について研究を深めていきたい。

# ２１　学校給食研究部

部　長　鶴田　伸司
副部長　橋本　季央
副部長　藤原三香子

1　研究経過のあらまし

（1）　テーマ「学校給食から広がる食育の推進」～豊かな心と健やかな体づくりをめざして～

学校給食を含め大きな視点で食育を捉え、本テーマを設定し、学級担任、栄養教諭、養護教諭、給食主任等と連携し、学校における食育を推進していくことについて研究を進めてきた。

（2）　活動方針の柱

学校給食における食育は、給食の時間、特別活動、各教科等の様々な教育の内容に関わっており、学校教育活動全体の中で、系統的な食に関する指導を計画的・組織的に行っていく必要がある。

ア　学校給食を含む食育を学校教育全体の中で、体系的・計画的・組織的に推進する方法を研究する。

イ　栄養教諭等と学級担任・給食主任・家庭科主任・養護教諭との連携力を高める。

ウ　研修を通して栄養教諭等の専門性を高める。

2　今年度のあゆみ

| | | | |
|---|---|---|---|
| 5/16 | 第１回推進委員会 | 小笠教育会館 | 本年度方針決定 |
| 6/30 | 第２回推進委員会 | 小笠教育会館 | 本年度の計画 |
| 8/3 | 第１回小笠・榛原地区合同役員会 | 土方小 | 令和６年度に向けての役割分担・日程等の検討 |
| 8/4～19 | 静教研夏季研究大会（Web 配信） | 各学校 | 研究発表、講演視聴 |
| 9/16 | 第３回推進委員会 | 小笠教育会館 | 指導案検討 |
| 11/9 | 一斉研究報告会 | 原谷小 | |
| 1/26 | 第４回推進委員会 | 小笠教育会館 | 本年度のまとめ<br>次年度の計画 |

3　一斉研究報告会

（1）　公開授業　掛川市立原谷小学校　第１学年　学級活動

ア　授業者　野代理恵教諭　澤﨑万智香栄養教諭

イ　活動目標

給食センターに関するクイズをしたり、使っている道具などを実際に見たり触ったりする活動を通して、給食を作っている方の苦労や思いを知り、感謝の心で給食を食べようとする意欲をもつことができる。

食育の視点：普段食べている給食を作ってくださる給食センターの方の苦労や思いを知り、感謝する心をもつ（感謝の心）

ウ　授業の概要

栄養教諭が、「何人分を作っている？」「何の道具？（実物を見せる）」「給食のカレーは玉ねぎを何個使う？」のクイズを出題してから、給食センターの仕事の様子を DVD で紹介する。給食センターで働く人からの手紙を聞き、それを聞いて子どもたちが思ったことを動画で撮り、感謝の気持ちを伝え、これからの給食の食べる意欲につなげる。

（２）研究協議

ア　授業の感想

・クイズを使った導入で楽しく学ぶことができていた。また、動画を見た後もクイズを使い、振り返りができていた。

・給食センターの仕事の DVD を音声無しで栄養教諭が説明することで、子供たちが興味関心をもつことができた。

・iPad を用いて、お礼の動画作成をしたことで、明日からの給食を食べようとする意欲につながった。

・栄養教諭との打ち合わせや授業がスムーズに行えるように、依頼文書を簡略化したり、栄養教諭のスケジュールを学校側が確認できるようにしたりして、連携を深めたい。

・家庭科や学級活動だけでなく、社会科（食料生産）や総合学習（SDG’s）などの教科でも、栄養教諭の専門性を活かした授業ができるのではないか。

ウ　食育に関する指導や活動のアイデア

・食べ物への感謝の気持ちをもつことは、1 時間の授業で解決するのではなく、長い目でみて生涯で思えればよいことである。きっかけや積み重ねが大切なので、日々の給食で指導していく必要がある。

・動画やクイズ、実物の用意など、子供たちの興味をひくものを取り入れていきたい。

（３）　指導・助言　静岡県教育委員会　健康体育課　教育主幹　眞田麻貴　氏

・教諭と栄養教諭の役割分担がきちんとされ、子供たちのつぶやきも多く、楽しく学べていた。

・ＩＣＴ活用が進んでいると感じた。動画を作成する際、何を言いたいのか考えたグループから iPad を取りに来るようにすれば、もっとよかったのではないかと思った。

・食に関する指導の留意点としては、「栄養教諭等の専門性を生かす」「事前の話し合いや準備を十分に行う」「指導の過程や成果の共有」「実態把握、課題等の情報共有」「子供たちに付けたい力の共通認識」があげられる。

・食育の全体計画を「チーム学校」として活用することが大切。進捗状況をチェックしたり、食育の評価をしたりして、改善を重ねていってほしい。

４　成果と今後の課題

今年度は集会形式の公開授業で、教諭と栄養教諭のそれぞれの立場の情報を共有することができた。毎日食べている給食から、食糧生産や栄養、感謝の心など題材として取り入れられる教科が多いことも話題となった。これからも情報を共有しながら、子供たちの心と体の健康につながる食育の推進を進めていきたい。